

世界の中での日本と自分の立ち位置をつかむ

添谷芳秀

法学部政治学科 教授

一学年15〜20名のゼミ生が、国際政治と日本外交の接点に焦点をあてた研究を行っている。信頼をベースに、各個性にとつて居心地のよい学びの場が生まれる。

世界の中での日本を語る際に、日本から世界をみる視点と世界から日本を鳥瞰する視点とがあります。往々にして、前者の立場は日本における価値観や常識から他国に対して批判的になり、後者の視点は日本の異質性を問題にしがちです。その両者の中庸はないものだろうか。それが、当ゼミが求める「国際政治と日本外交の接点」という視角の背景にある問題意識であり、世界の中で日本を相対化する方向へと思考を導きます。

そうした思考は、結局個人の次元の考え方に行き着きます。憲法9条の改正に賛成か反対か、日米同盟や在日米軍の存在をどう思うか。こうした一見個人の価値観や思想と深い関係にありそうな問題も、あの戦争の戦後処理や冷戦の激化という国際政治変動、そしてそれと密接に関連して形づくられた日本政治のあり方という構造的な環境のもとで生まれたものといえます。私たちの誰もが、何かの巡り合わせで、たとえば中国に生まれ育ったとし

たら、政治や外交に関する考えが今とは全く異なったであろうことは、容易に想像できるかと思えます。こうして個人を相対化する視点から国際政治や日本外交を考えなおしてみると、国家間関係における信頼構築には「共感(empathy)」が不可欠の前提であるという視点が生まれ、それが他国の事情や国際関係を学ぶ動機づけにもなります。

私たちのゼミでは、以上のようなことを、研究においてもゼミ生同士の間関係においても実践しようと心がけています。基本方針は至って単純です。個性は「自由」に發揮してほしい。しかし、その結果の「責任」を取ることに關して甘えは許されない。自分を大切にすることとは、他の個性も思いやり尊重するということ。あとは学年ごとの応用問題ですが、これまで誕生した24期におよぶ学年全てが、自覚をもつてのびのびと、それぞれにとつて居心地のよいゼミを作ってくれています。

自主性と両立精神

田中雄大君

法学部政治学科4年(執筆時)

「自由と責任」の指針のもとで、3年前期には毎週の課題図書とレポートに悪戦苦闘し、その後は三田祭での共同研究と卒業論文の執筆を行っています。ゼミ生には、体育会に所属する者や国際会議を主催する者など、課外活動に精力的に取り組む学生が多くいますが、「両立とは全てで妥協しないこと」という教授の言葉を胸に日々研究に取り組んでいます。

学生の特徴としては、みな芯が強く、受け売りではない自分の意見を持っています。共同研究では、自らが考え抜いてたどり着いた意見を激しくぶつけ合いながら、よりよい論文を書くために切磋琢磨しました。自主性を重んじる教授の方針と両立精神の強い学生の気質によって、濃密なゼミ生活を送っています。



モノ作り現場における問題発見と問題解決

稲田周平

理工学部管理工学科 准教授

我々の生活をもっと豊かに快適にしてくれる生産システムの構築を目指して、「厳しく・楽しく」をモットーに日々学生と共に研究を進めています。

インダストリアル・エンジニアリング（IE）は、生産システムを考察の中心対象として、そこでの人・物・金・情報等の経営資源を科学的な方法で有効に統合化し、市場が要求する商品やサービスを高品質で安くタイムリーに提供するための理論と技術です。現在、Kaizen（改善）という日本語は翻訳されることなく世界中の工場で使われていますが、この改善を支える理論基盤はIEにあります。

研究室では、このIEをベースに生産システムの管理と改善に関する技術開発および理論考察を行っています。テーマの例としては、多能作業者の有効活用、物流倉庫における入出庫業務の効率化、作業者の視線捕捉に基づく作業システム評価といったものが挙げられます。近年では、病院やホテル等のサービスシステムにおけるIEの活用を検討したり、産業用ロボットによる作業改善を可能にするための方法論の開発を行ったりもしています。研究を進めるにあたっては、学生と

一緒に委託研究先の工場に終日張り付いてデータを採取することもあれば、コンピュータ・シミュレーションを行ったり、数式をいじりまわしたりと形態はさまざまです。ただ、一貫して、現場で観察された事実や採取されたデータと素直に向き合うこと、そして、得られた事実を常に理論的に紐づけながら推論と検証を進めることを大事にしながら学生と一緒に研究を進めています。学生の粘り強い現場調査やフレッシュな視点での分析から、一気に視界が開けてくることも少なくありません。

実際に行われている業務を改善・改革していく上では、数理の視点に基づく理論的な思考が極めて有効な武器になることは間違いありません。一方で、改善・改革を行うのはヒトであり、それらが着実に進められていくためには、そこに従事するヒトへの学術的側面からの理解や研究が欠かせません。バランスを失うことなく、研究を続けていきたいと考えています。

「ムダ」を見つける

ふちざわまさし

潤澤雅志君 理工学研究科修士課程2年

私たちの研究室では、時間やお金、疲労度といった面から見て、どのようにすればより効率的に物事を行えるのかということについて考えています。問題点を「ムダ」という形でとらえ、特にモノ作りの現場を中心として、日常生活の中も含めさまざまな種類のムダをテーマにして研究を行っています。実際にモノ作りの現場で分析を行うと、何気ない行動の中に自分が思っている以上のたくさんのムダが潜んでいることに気付かされます。このようなムダをなくすため、稲田先生の指導の下で学生同士協力しながら、自由な発想でさまざまな視点から問題解決に取り組んでいます。

